

街並色彩に関する研究 — 日欧の新旧都市を比較して —

主査 乾 正雄*¹
委員 榎 究*², 山本 早里*³, 中山 和美*⁴

日欧の新旧街並を取り上げ、それぞれの歴史の変遷を考慮に入れて、現状の色彩調査を行った。調査対象は、今井町の御堂筋、川越市の一番街、日本橋の中央通り、渋谷の公園通り、ヘント（ベルギー）のグラスレイ、ザルツブルク（オーストリア）のアルターマルクト、ウィーン（オーストリア）のマリアヒルフ通りである。

調査の結果、日本でも欧州でも、保存体制が確定された歴史的街並は色彩によるまとまりがあった。総じて、日本の街並の方が色相が多岐にわたっていること、無彩色の割合が多いこと、明度、彩度のばらつきが大きいこと、などの特徴がある。日本の街並の今後の保存や開発には、それと類似の歴史をもつ欧州の街並色彩のあり方が参考になると考えられる。

キーワード：1)街並, 2)色彩, 3)日欧, 4)都市, 5)歴史

JAPANESE AND EUROPEAN STREET COLORS

Ch. Masao Inui

Mem. Kiwamu Maki, Sari Yamamoto and Kazumi Nakayama.

The purpose of this study is to obtain how to color the facades of a street including their circumstances. A survey was made of the colors used on the facades of four Japanese streets; Imaicho, Kawagoe, Nihonbashi and Shibuya, and three European streets; Ghent, Salzburg and Vienna.

The historical streets possess color harmony with natural materials in both Japan and Europe. Generally speaking, the Japanese street has characteristics such that the colors are chosen from the wider range of hue, value and chroma and that neutral colors are used more often. For the future preservation or redevelopment of a Japanese street, the way is best found by reference to a European street which has similar history in color.

1. はじめに

街並色彩の研究における一つの有力な方法は、ある年月をかけて形成されてきた街並色彩の実情を、個別にかつ全体を見て定量的に分析することである。単一の設計組織が、新しい町をそっくり設計するような機会は今後それほどはない。すべてが新しい、前衛的な街並づくりの時代は過ぎた。現に存在する街並に、一つ、二つ、と建物をつけ加えるとき、街並が美しくなるか醜くなるかが、これから考えなくてはならない主要な論点である。

一つの新築建物の色彩は、街並の色彩に調和しなくてはならない。最初はそれだけが問題である。しかし、その建物は、次の建物が新築される時点では、もう街並の一部となっている。新しい建物の色彩も、すべていつかは街並色彩側、つまり以降出現する建物の色彩に調和を強いる側にまわる。したがって、街並全体の美醜は長期的に監視されなくてはならない。

しかも、街並の寿命は人間の寿命より長い。日本では19世紀はじめの街並を今に見ることが可能である。さらに、ヨーロッパの石造建築の並ぶ街並では、大略16世紀に成った街並が残っている。しかし、たいいていの街並は近代以降に成立したものである。一方、街並の沿革は各様で、成立後ほとんど変化のないものもあれば、改修の多いもの、新しい建物がつけ加わっているものもある。このように見ると、世界には、人間にたとえればさまざまな年齢の街並、さまざまな生き方の段階すなわちライフステージにある街並があることがわかる。

本研究は、さまざまなライフステージにある日欧のいくつかの街並を取り上げ、それらの成立、沿革、現状を示す資料と、色彩の物理的データとをつき合わせて、街並色彩に関する新しい知見を得ようとするものである。

このため、本研究では次のような方法によって研究を行った。

*¹ 武蔵工業大学工学部建築学科 教授

*² 実践女子大学生活科学部生活環境学科 助教授 *³ 鎌倉女子大学家政学部家政学科 専任講師

*⁴ 東電設計株式会社建築意匠部 課長代理

- ①古いままに保たれている街並の美しさを現代色彩科学の言葉を使って表現する。
- ②修復、改装、増築などしている街並については、その色彩の変遷をできる限り解明する。
- ③現代の街並の色彩を上と同様に表現することによって、その美的問題点を探る。
- ④ヨーロッパと日本の街並色彩を比較することによって、わが国の街並の明治維新以来の西欧化の適否を論じる。本研究では、対象としてヨーロッパと日本の中世以降のさまざまな年齢段階にある街並を選んだ。ヨーロッパを比較対象として選んだ理由には、
 - ①実際によく保存された定評のある街並が多いこと、
 - ②明治以来の西欧化の過程で範としてきた地域の街並は、日本の街並と比較しやすいこと、
 が挙げられる。

予備調査を経て、以上の目的に合致する街並を、日本、ヨーロッパからそれぞれ選定し、日本は四つの街並、ヨーロッパは三つの街並、計七つの街並を調査対象とすることにした。今井町（奈良県橿原市）の御堂筋、川越市（埼玉県）の一番街、日本橋（東京都中央区）の中央通り、渋谷（東京都渋谷区）の公園通り、ヘント（ベルギー）のグラスレイ、ザルツブルク（オーストリア）のアルターマルクト、ウィーン（オーストリア）のマリアヒルフ通りである。2章ではそれぞれの街並の色彩の歴史の変遷を述べ、3章では現在の街並の色彩の現状を測定した結果を示し、日欧の街並比較を行う。

2. 歴史的に見た街並の概況

2.1 今井町、御堂筋

奈良県橿原市今井町は、長方形の土地に約800棟の伝統的な独立家屋と長屋が密集して建っている町である。人口は過密で、道幅がせいぜい3m程度と狭く、展望のきく丘もなければ塔もなく、広場もほとんどないので、町はパノラマ風には見られ得ない。

一向宗門徒が集まって今井に町を開いたのは16世紀半ばの室町時代末期といわれる。当初の今井は、御坊を中心とする寺内町で、環濠がめぐらされ、土塁が築かれ、木戸があるなど、防衛に重きをおいた作りだった。17世紀の古図にそういう様子が描かれている。ほぼまっすぐ東西と南北に走る街路は、その後もほとんど変わっていないが、今日、環濠は道路化され、土塁や木戸は消失している。

御堂筋は、東西に走る街路の一つ、御坊である称念寺の表門が接し、大型町家が建ち並ぶ、格の高い通りである。ここだけは道幅が4mあるのは、明治天皇が行幸時、称念寺の客となった機に拡幅したからという。この通りでは江戸時代の建物が60%、明治時代が16%、大正から終戦までと大戦後が各12%を占める。

弥念寺本堂は奈良県指定文化財で江戸時代前期の建立と考えられる。同じ弥念寺の太鼓楼は橿原市指定文化財だが、弘化2(1845)年の銘のある獅子口が残っており、そのころの新造と考えられる。

この通りには、重要文化財に指定されている住宅が2軒ある。一つは豊田家住宅で入母屋造り、南面と北面に庇のついた本瓦葺、つし2階建、いくつかの鬼瓦に寛文2(1662)年の刻銘がある。今一つは中橋家住宅で、南面庇つき本瓦葺、つし2階建、18世紀後半の建物と見られる。両者に共通しているのは、大壁造り、連子格子、虫籠窓、屋根の煙出しなどである。伝統的住宅では、一般に、色彩はグレイの瓦と木と白い漆喰くらいだけしかない。

明治、大正から終戦まで、と時代がすすむと、古い商店でも、蔀戸、大戸、格子戸などを取り去り、開口部いっぱい広がるガラス戸をもつようになる。また明治以後の新築住宅では真壁造りがふつうになる。それらは伝統的街並にまざまざ調和する。しかし、大戦後の商店におけるタイルや各種ボード張り、白とグレイ以外の漆喰塗装などは、とうてい伝統的街並に調和しない。御堂筋でも、そうした不調和が、二、三含まれる。

2.2 川越市、一番街

埼玉県川越市は、古くから、荒川西岸における軍事や交通の要衝であると同時に、作物、物資などの生産力が高かったので、江戸の後背地としての役割を担っていた。初期の城下町は16世紀には成立していたが、寛永15(1638)年の大火で灰塵に帰した。翌年入府した松平信綱は、札の辻を中心とする新しい町割を定めて、町の再建に取りかかった。

川越・江戸間は新河岸川の舟運で結ばれており、江戸との盛んな物資の交流が「小江戸」とうたわれた川越の繁栄の基礎だった。幕末にかけては街並もよく整ったよう「城下の町並繁栄にして、江戸今川橋通りより神田須田町筋によく似たり」(釈敬順『遊歴雑記』)といわれている。

繁栄していた川越は明治26(1893)年3月、再度の大火に遭い、目抜き通りの商店街をあらかた失った。しかし、何軒かの土蔵が焼失をまぬかれたことを見て、経済力のある商人たちは競って蔵造りによる再建を試みた。大火後の蔵造りには、黒漆喰塗りの壁、背の高い箱棟、観音開きの窓などの特徴があるが、それは「まさに幕末日本橋界隈の蔵造りの系譜であり定型化されたものであった」(川越市教育委員会『蔵造りの町並』)。

明治の後半に建てられたその蔵造りが、今日、川越の見せどころになっている。それらは一時は100軒に近い数に達したろうといわれるが、半数以上は高度経済成長期のあいだに取り壊された。しかし最近の保存志向にそって復旧されたものもあれば、懐古趣味に乗って建てら

れた平成の新作もある。

一番街は、札の辻から南へ向かう約400mほどの通りで、川越市でもっとも古くかつにぎやかなところだが、そこでは蔵造りは全戸数の約20%に達する。蔵造りをもっとも集中しているのは、通りの中間辺の西側で、連続して4軒並んでいるところがある。この通りには、ほかに、蔵造りと同様、明治の大火後に建てられた、真壁造りで2階に千本格子のついた窓のある、ふつうの町家もほぼ同程度存在する。

さらに、少数ながら、田中屋美術館(1915年)のような看板建築がある。一見西洋館のように見えるが、洋風なのは街路側表面だけで、背後の建築主体は蔵造りである。また、旧八十五銀行ビル(1918年)のような鉄筋コンクリート造3階建ビルもある。古い日本家屋と大正や昭和初期の古い西洋館の取り合わせは、西欧化黎明時代の原風景のごときもので、かつてはめずらしくなかった。そして、案外よく似合う。

一番街では、大戦後は、新建材や塗色の目立つ商店ビルが増え、全戸数の約40%を占めるようになった。それらでは、意匠や色彩に蔵造りとの調和を意図したものがほとんど見当たらない。ただし、景観条例施行後の建物については多少の改善はあったと考えられる。

2.3 日本橋、中央通り

橋としての日本橋は、徳川家康が慶長9(1604)年に架けた太鼓橋にはじまる。橋は当初から、江戸でもっともにぎやかな町人地を南北につらぬく街路の中心的存在であったと同時に、国内各地へ延びる五街道の起点と定められた。火事の多い町だったので、被害の都度建て直されたが、明治44(1911)年架橋の石造二連アーチ橋は今も健在である。

日本橋界隈の町家は、江戸時代初期にはまだ、草葺や板葺の屋根で木部を無造作に露出した古いタイプの町家が主流だった。それが、享保5(1720)年の改革によって、瓦葺塗家造りや土蔵造りが奨励され、大いに変わったという。火事が多いという事実は、建て直しの機会も多いことを意味するから、上述の変化は目に見えるほどのものだったであろう。

さらに明治14(1881)年の東京防火令で、日本橋の主要な街路に面する建物は、板葺や塗屋ではなく、蔵か煉瓦造か石造の三つのうちのどれかでなくてはならなくなった。しかし、住民たちが選んだのは蔵だった。土蔵造りは江戸時代から知られていた火事に強い町家であるとはいえ、日本橋の商人の和風へのこだわりを感じさせる。このとき好んで使われた「江戸黒」の壁は、白壁より一工程手間がかかるが、それでも黒くするのが日本橋商人の気概だったのだろう。こうして、白っぽい街並から黒っぽい街並への激変がおこった。明治15(1882)年に描か

れた「東京名所日本橋京橋之間鉄道馬車往復之図」(紅英斎)によるならば、日本橋中央通りの黒い街並は早くもほぼ完成している。

しかしながら、この黒い街並もまた長くはもたなかった。近代化の進行が伝統的な蔵造りの維持を困難にさせた。木造漆喰塗りだが国籍不明の「洋風に似て非なる建築」や、蔵造りだが街路からは平面的にそそり立つファサードだけが見える看板建築が徐々に増えだし、明治末年には蔵造りをしのぐほどになった。そのころ蔵造り商店の30%にショーウィンドーがついていたというから、蔵造りといえども昔風の店蔵ではなくなっていた。そして、日本橋中央通りの拡幅が成り、石造の日本橋が架かり、本格的な洋風ビルが建ちはじめた。

橋のたもとにある野村証券ビル(1930年)は通りから少し引こんでおり、隣には東海銀行の新しいデザインの新ビル(1975年)がある。二つのビルに共通の煉瓦色は、日本橋では異色だが、煉瓦色のコーナーとしてままとまっている。

この通りでは三つのデパートが商店街をリードしてきた。数奇な運命をたどった白木屋では、大正7(1918)年のルネッサンス式の鉄筋コンクリート造4階建ビルは関東大震災で焼失した。昭和3(1928)年のインターナショナルスタイルの7階建ビルは昭和7(1932)年に有名な火事を出し、修復後、「東京大空襲」でまた被害を受けた。戦後、白木屋は東急に身売りして昭和32(1957)年に外装をそっくり変えたが、最近その東急が店を閉じた。三越(1914年)は竣工時「スエズ以東他に比なし」といわれたほどのビルだが、増築がくりかえされるあいだに、外装が不統一になって久しい。その点、高島屋(1933年)のファサードにはまとまりがあり、初期のデパートらしさが残っている。

そのほかで言及すべきものは、ギリシャ建築のような列柱の目立つ古典的な三井本館(1929年)につきる。これは、おそらく通りでもっとも存在感のある建築だろう。

日本橋中央通りで最大多数を占めるのは、第二次大戦後に建設された、横長連続窓や全面総ガラスのビルたちである。それらは1960年代の高度経済成長期前半に成ったもので、今日から見るとデザイン的に物足りない。とくに、間口の狭いビルにおいては、横長連続窓も総ガラスも貧弱に見えがちなので、物足りなさも大きくなる。もともと、間口が極端に狭いビルは、かつては蔵造りや看板建築だったろうから、歴史の経緯を読むのには興味深いのだが、美的見地から肯定的に評価することはむずかしい。

2.4 渋谷、公園通り

明治時代のはじめには、渋谷で街並を形成していたのは大山街道ぞいの宮益町と道玄坂の一部に過ぎなかった。

しかし、明治、大正を通じ、都市化は急速にすすんだ。明治18(1885)年に品川鉄道(現山手線)が開通し、大正末以後、玉川電車、東横線、井の頭線などの私鉄交通網が整い、そして昭和14(1939)年に渋谷浅草間の地下鉄が全通した。その時点で、渋谷は東京のターミナルの町として一人前になったといつてよい。ただ渋谷の繁華街は駅すなわち東急百貨店中心の狭い範囲に限定されていた。

一方、渋谷の北側の広い高台は、明治のはじめまで武家屋敷の集まったところだったが、明治末以後は代々木練兵場として知られていた。戦後は一時、占領軍の住むワシントンハイツとなったが、返還後は、広大な土地に、1964年の東京オリンピック施設、NHK放送センター、代々木公園などが相次いでつくられた。

当然、駅付近と高台のあいだの町は活気をおびる。公園通りは、西武デパートB館と二つの丸井に囲まれた一角から発し、坂を登りきって左にNHK放送センター、右に代々木競技場が望める交差点で終わる。かつては名ばかりの商店街だった通りを、1970年代になってから、しゃれた街灯をつけたり、歩道を拡幅したりして売り出し、1979年には元の区役所通りを「公園通り」と改めた。

公園通りの代表格、バルコパート1(1973年)ができたとき、すでに存在していたのは丸井(1971年)、山手教会(1964年)、渋谷区総合庁舎(1965年)など少数で、大半は1970年代後半から80年代の新しいビルである。それらでは、形態は変化に富んでいるが、色彩はあまり使われていない。

道を歩く若者や設えられた今様のストリートファニチャーも含めて、もっとも新しい街並の一つといつてよいだろう。一見してどこの国の町かわからない印象を受ける。一つには看板でアルファベットが優勢で、日本文字が見つけにくいからだが、もっと本質的には、すべての建築が日本の伝統から切り離されているからである。こういう無国籍性は、将来は知らず、現在は建物が見ごろでわるいとはいえない。

2.5 ヘント、グラスレイ

ベルギーのフランドル地方の町、ヘントの都市化は10世紀にはじまり、14世紀前半の50年間には人口60,000人を擁する、アルプスの北側ではバりに次ぐ第二の大都市だったといわれる。また、歴史の古さと、古い建築のおもしろさでは、ヘントはブリュッセルやブルッヘに優るともいわれる。11世紀以来交易が盛んになり真にヘントの港になった、グラスレイや対岸のコールンレイに建ち並ぶギルド集会所や、背後にそそり立つ教会の塔が、昔日の繁栄を如実に示している。

ヘントには、ロマネスク建築がいくつか現存する。市内の多くのロマネスク教会はどれも無傷で生き延びることはできなかったが、郊外アフスネーの聖ジョン教会が

残っている。フランドル伯の居城が残っている。コールンマルクトでは1軒の住宅が残っている。そして、グラスレイでは次に述べる穀物倉庫が残っているのである。

グラスレイの景観では14番(以下、ヨーロッパの街並で頻出する、このような番号は番地を示す。紙数の制約があつて、地図は載せられなかった。)から左へ連続して並ぶ6軒がすべて有名で、いずれも切妻屋根の破風を正面に見せる、堂々たる石造建築である。

14番は「自由船員組合のギルドホール」。もとの建物、1530年に自由船員組合が買い取り、ファサードを一新した。ブラバント地方のゴシックで、扉の上には快速帆船が描かれ、リボン状の模様には1531年と記されている。13番は「穀物計量検査官の新館」。穀物計量検査官たちは1540年にここにあった古い家を買ひ、その家の前面に1698年、この町独特のルネッサンス様式の煉瓦造ファサードを建てた。12番は「港使用税徴収官の建物」。見落としそうなほど小さい家だが、れっきとしたルネッサンスの切妻屋根をもっている。破風の渦形装飾に1682年とある。

11番がロマネスク様式の「穀物倉庫」である。古くは税として現物で徴収された穀類を保管した。石灰岩による、一目でロマネスクとわかる階段状ファサードは12世紀第4四半期からのものと認められている。ただしこのファサードと側壁だけが当時のもので、他は19世紀末の火事の後と修復された。この建物の左側に平屋根の小さな建物(10番)が見えるが、それは裏側にある母屋の離れで、ふつう勘定に入れない。

9番は「穀物計量検査官の旧館」。1435年から1540年まで穀物計量検査官たちが集会場としていたが、既述の新館に移転した。現在の建物は16世紀前半からのものだが、心壁はもっと古い。煉瓦と白い石を使ったルネッサンス様式の階段状破風をもつ。8番は「石工のギルドホール」。このブラバント地方独特のゴシック建築は、1527年に別の場所に建てられたが、19世紀半ばには壊されてしまっていた。しかし1912年、グラスレイを飾るため、現在の場所に新しい砂岩を使って再建された。

グラスレイの色彩はほとんど茶色系一色である。フランドル・タイルやスレート屋根、砂岩や煉瓦石のファサード、板戸などの茶のためである。一部に白い石や石灰砂岩の白、グレイが存するがあまり目立たない。こういう豪華な石造建築では、石に彩色することはないから、石の地色以外の色はほとんど出現しない。

2.6 ザルツブルク、アルターマルクト

オーストリアのザルツブルクはアルプスの北側の町ではあるが、イタリアにも近い。16世紀末に大司教兼領主になったヴォルフ・ディートリヒ・フォン・ライテナウは、ローマで育ちメディチ家と親しかったという代表的

なルネッサンス人で、イタリアの建築家を招いてこの町を「北のローマ」にしようとした。事実、現在の町の骨格はそのころ形成されている。彼の理想は、私生活の放縦をローマの法廷でとがめられて挫折したが、彼につづく大司教たちも、イタリアを範とする町の建設をつづけ、17世紀中には今われわれが見るような旧市街を完成させた。

その後は、ザルツブルクでもバロック化があったが、ウィーンにおけるような極端なバロックも近代化運動も現れなかった。その代わり、ザルツブルクの市民住宅では色彩に話題がある。

17世紀の第2四半期に描かれた作者不詳のパノラマ風油絵を見ると、大抵のファサードは白だが、ときにグレイ、緑、黄土色などのものが混ざっている。緑のファサードにはアーケード・アーチや窓枠に黄の緑取りがある。別の、17世紀後半のリンツ通りの絵では、ファサードのえぐり（外側にめくれるように出っ張った上端の帯状部分）が赤茶または緑の強い色で、そこに白で字が書いてある。アルターマルクト3番の家を黄緑の濃淡二色で、4番の家を濃い緑で描いた絵もあった。当時からザルツブルクは部分的にはカラフルだったのだ。

しかし、19世紀には不況の時代が長くつづき、色が使いにくくなったのか無彩色のファサードが増え、町はひどくよごれ、荒れ果てたという。やっと1870年代になって、いくつかの市民住宅が修復された。当時、よく使われた色彩は、もっぱら自然石に近い、グレイ、灰赤、灰緑のような色彩だった。おそらく、建物が石に似た色に塗られるのは、漆喰塗りの建物を往々石造りと見る素人の思いこみを当てにしている。

本格的な色彩化の時代は1920年代にやってきた。アルターマルクト1番の家はインド赤と黄で豊かに彩色された。狭い路地をはさんだ向かいの家（クランプフェラーガッセ1番）は、黄の目地で分割された青に塗られた。二つの大戦のあいだは、総じてこのような強い色彩が多く用いられた。それに対して、第二次大戦後は、明るいクリーム色のパステルカラーが優勢になった。

アルターマルクトでは、レジデンス以外はすべて市民住宅である。それらの建設はおおむね16世紀と認められるが、建設後、ファサードはつくり替えられ、漆喰はくりかえし塗りなおされている。現在の破風装飾、窓額縁、窓庇、軒蛇腹などはあらかた1800年前後のものである。1階商店部分はほとんどすべて20世紀になってから改修された。ファサード色彩は大戦後の色調だが、色相は塗り替えの際変更されることがあり、現在も明るいクリーム的主流に変わりはないが、他の色相のパステルカラーが増加傾向にある。

1番と7番はピンクである。2番の色彩は一口でいうと黄緑だが、1階部分の黄緑や窓庇の黄緑は微妙にちが

うし、窓まわりには部分的に黄土色も使われている。そのファサードは装飾が多く、階ごとに窓額縁デザインがちがう。窓庇でいうと、2階は水平線、3階は折れ線、4階は曲率をもった線という具合である。6番も黄緑。9番のカフェ・トマセーリは今は紫だが、数年前までは黄緑だった。10番は青。その他はすべてクリームかその近辺の色である。

2.7 ウィーン、マリアヒルフ通り

ウィーンといえば、一般には歴史の古い都市と理解されている。しかし、ここで取り上げるのは、歴史的建築物に富んだインネレ・シュタットの街路ではなく、そこから放射状に各方向へ延びる道路の一つで、西へ向かうマリアヒルフ通りである。それは中世には原野をつきすすむ山腹道路だった。ウィーンがトルコ軍に包囲された場面の絵によると、当時は家がとところどころに建っているにすぎず、連続した家並にはなっていない。

近世になって都市の膨張が急速になると、マリアヒルフ通りも当然、都市化するのだが、そのころ以来ヨーロッパの大都市は西方向に勢ぞろいするので、とくに西へ向かう道路の重要性が増した。1858年、通りぞいに西駅が開設された。西駅は、数あるターミナル駅の中でも、パリやロンドンと結ぶ国際列車の起点として最重要なターミナルである。1869年には、通りは市電網に組みこまれた。これで商店街としての発展は約束されたようなものだった。

西駅の開業と市電の敷設のあと、19世紀末にはいくつかのデパートが開業した。26～30番のヘルツマンスキー百貨店は、早くから通りでもっとも知られたデパートだったが、ごく最近100年を越える長い歴史を閉じた。外壁は1988年に改装されているが、横町側に1897年当時のファサードが原型のまま保存されている。42～48番は同じころ創業のゲルングロス百貨店で、1980年の火事のあと修復されている。

上の二つのデパートもそうだが、マリアヒルフ通りには、1900年前後の世紀転換期のビルが60%というほどに多い。ドイツとオーストリアでは普仏戦争（1870～1871年）のあと好景気の時代が長くつづき、会社の設立とビルの建設が盛んだった。戦争直後の短い時期を創業者時代と呼び、その余韻のつづく1900年前後の時代を創業者時代末期といっている。この通りは創業者時代末期に繁栄し、第二次大戦後の復興によって再度の繁栄を遂げた。今は、ケルトナー通りに次ぐウィーンで第二の繁華街としてにぎわっている。

3. 街路の色彩調査

3.1 測色調査概要

各街並の色彩の現状を把握し、その特徴を考察するこ

表3-1 測色対象の選定基準

測色対象の概要		選定の基準	呼称
①	建物	1) 大面積を占める外壁色彩 2) 建物の基調色	建物色
②	構成要素	1) 面積の大きいもの 2) 強調色, 配合色になるもの	
③	建築物に付属する看板, 店舗の装飾などの色彩		付属色

とを目的として, 測色調査を実施した。

1) 測色対象

測色対象は, 街路の基本単位である建物とその構成要素に着目して選定した。1棟ごとに建物の基調となる1色を必ず選定し「代表色」とした。そのほかに, 「代表色」以外の外壁の色や, 窓枠, 扉など建物を構成する要素の色を「構成色」として, 看板等の建物付属物で大面積のものやアクセントになっている部分の色を「付属色」として選定した。測色対象の選定基準を表3-1にまとめた。

各街並の測色対象の選定は, 現地において測色者3名の合議により行った。なお, 測色者は視感測色の経験者である。

2) 測色方法

色彩の測定は, 以下の手順で行った。

- ①事前文献調査, 地図等により, 対象範囲を大まかに選定する。
- ②現地において, 対象範囲を確定する。
- ③ポラロイドカメラで建物を1棟ずつ撮影する。
- ④調査シートを作成し, 測色対象および測色箇所を選定する。
- ⑤測色箇所を確認しながら, 測色調査を実施する。

測定は, JIS標準色票を用い, 標準色票の視感比較方法に則して実施した。ただし, 測色箇所が建物の上層部等にあり, 測色箇所と標準色票とを同時に比較できない場合は, 日光の状態, 面積効果, 距離等を考慮しながら推定した。測定は, 1997年7月~1999年5月の間に実施した。

3.2 街並ごとの測色調査結果

調査では, 各街並の各建物につき, 1~20箇所, 平均3.70箇所を測色した。測色対象の種類によって, ①代表色, ②構成色, ③付属物に分けて整理した。図3-1に, 街並ごとの測色数を示す。

測色結果から, 測色対象の種類ごとに, 色相, 明度, 彩度の出現頻度と, 色相, 明度, 彩度の組み合わせによる散布図を求め, 各街並の様相を捉えた(図3-2~3-15)。

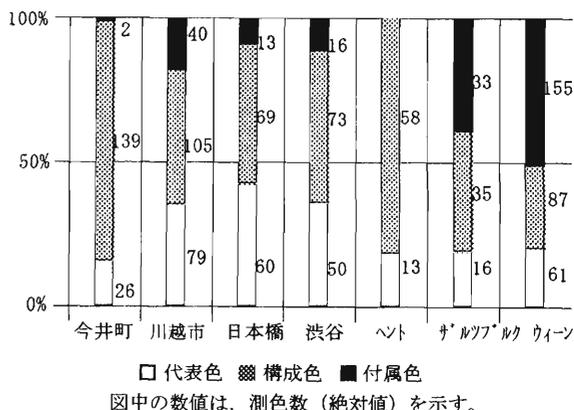


図3-1 街並別測色数

1) 今井町, 御堂筋 (図3-2, 3-3)

大半の建物は2階建と小規模であったが, 構成色の色数は多かった。これは, 1階が木造の壁や建具等であるのに対し, 2階部分は塗り壁でつくられており, 外壁だけで仕上げ材が2種以上存在していたためである。また, 軒が低く, 屋根が視界に入ったことにもよる。付属物は少なく, その色数は一つのみであった。建物1棟あたりの平均測色数は6.42であった。

代表色は, 2階の漆喰面と木面がほとんどである。色相は漆喰面のN (38.5%), Y (34.6%)が多く, 次いで多いのが木面のYR (11.5%)であった。他の色相も見られるが, 全体的に高明度, 低彩度であるためそれほど色味を感じさせない。明度は8以上が69.2%, 彩度は1以下が76.9%であった。

構成色は, 主に1階の木製の棧や建具の色であり, YRが44.6%と非常に多い。明度は代表色に比べて低め(5以下が69.1%)になっている。彩度は3以下が79.9%であった。PB・中明度・低彩度の色は, 主に屋根瓦の色であった。

代表色は2階部分に, 構成色は1階部分に多く分布している。代表色と構成色では, 明度の平均値の差が2.6以上と大きい。この明度差が街路立面を二層化して見せている。また, 街並を空間的に横に連続して見ると, YRが1階に繰り返し出現していた。この二つの色彩的な特徴が, 連続した街並という印象を形づくっている。

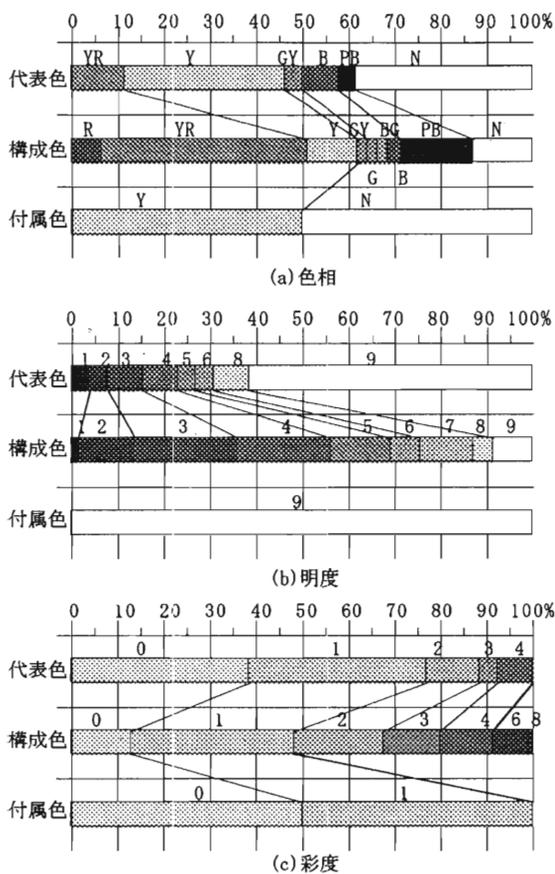


図3-2 今井町，御堂筋における色彩の出現頻度図

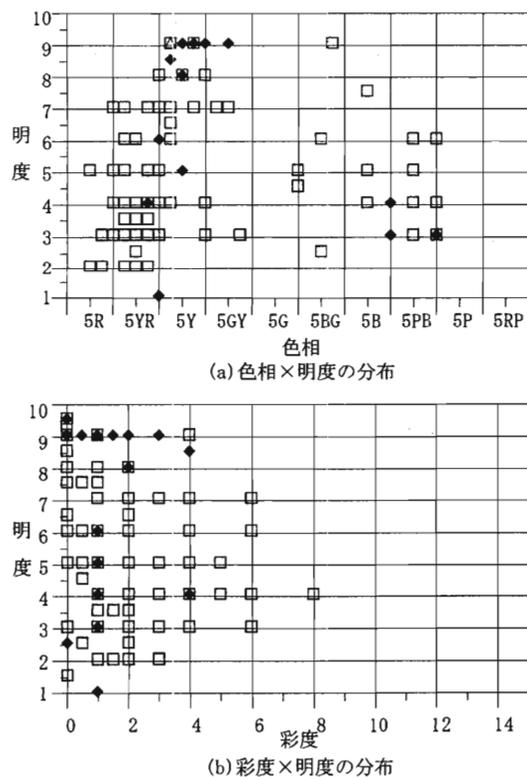


図3-3 今井町，御堂筋における色彩分布図
◆ 代表色 □ 構成色 △ 付属色

2) 川越市，一番街 (図3-4, 3-5)

2階建が中心の低層の街並である。建物1棟あたりの平均測色数は2.84であった。

代表色は，今井町と同様に2階の壁面である。色相は，YR (35.4%)，Y (26.6%) が半数以上を占めていた。G，PB，RPもわずかに見られ，6色相にわたっていた。Nは約23%と多く分布していた。明度が低く，明度2～4が約56%を占める。これらは，黒漆喰の色による。低彩度が多く，彩度2までが約70%を占める。若干高彩度のものがあるが，これらは木材の色であるYR系の中明度であった。

構成色の色相は，代表色と同様にY，YR，Nが多く見られるが，他の色相も出現している。明度は，代表色は黒漆喰の低明度であったのに対し，建物構成色の明度はやや高めであった。彩度はばらつきがある。

付属色では，YRが約60%と多く，これは木材の建物色になじむように造られた店舗部分の色である。次いでR (17.5%)が多かった。

街並全体を通して，1階には木の茶系，2階には漆喰の黒が多く現れるので，空間的な連続性が見られる。しかし，近代的な建物が点在し，それらが連続性を乱している。

3) 日本橋，中央通り (図3-6, 3-7)

他の街並に比べて付属物の測色数が少ないため，建物1棟あたりの平均測色数は2.37と最も少なかった。

代表色は，色相の種類が少なく，R，YR，Yが合わせて約78.3%，無彩色 (N) が約17%であった。明度は8以上が約32%あるが，中明度，低明度もほぼまんべんなくある。低彩度が多く，無彩色を含む彩度1以下が約半数を占めていた。

構成色は，代表色よりも色相数が増え，明度はまんべんなく分散していた。彩度1以下が約65%であった。

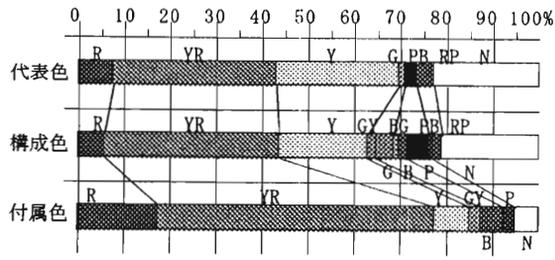
付属色は，数が少ないが，なかではYR (30.8%) がもっとも多く，無彩色 (N)，R，Yが共に20%強であった。デパートの赤が目立つが，それ以外はあまり目立たない。

全体的には，色数が少なく，しかも無彩色を含めた低彩度の色が多く見られ，統一感のある街並になっている。

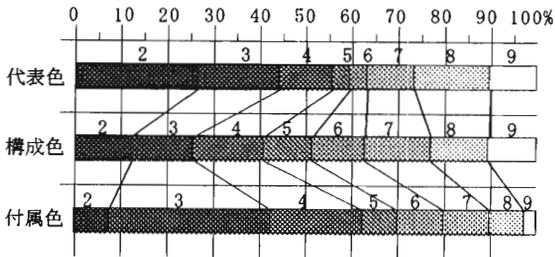
4) 渋谷，公園通り

建物全体が店舗として総合的にデザインされているものが多い。小さい看板が点在しており，色を測り切れないため，主要な看板のみを付属色の測色対象とした。そのため，建物1棟あたりの平均測色数は2.78で，あまり多くない。

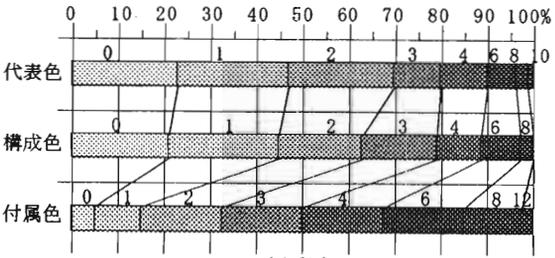
代表色は，色相の種類が多い。R，YR，Yの暖色系は約56%で，寒色系 (B，PB，P) は14%を占めていた。Nは26%であり，全体の約1/4であった。高明度が多い



(a) 色相

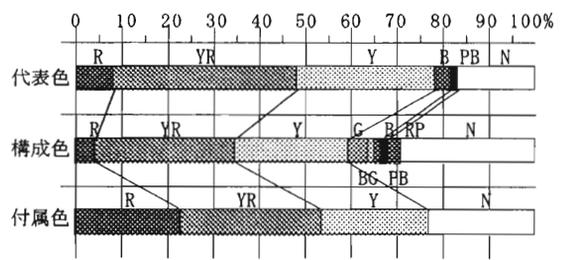


(b) 明度

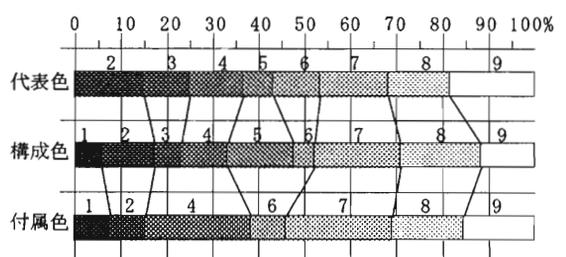


(c) 彩度

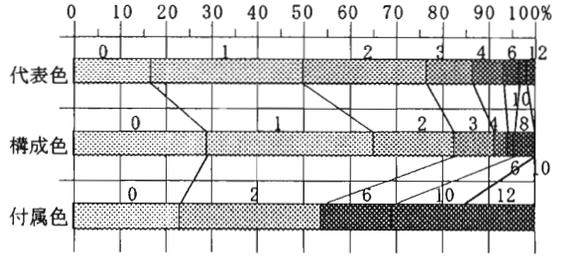
図3-4 川崎市，一番街における色彩の出現頻度図



(a) 色相

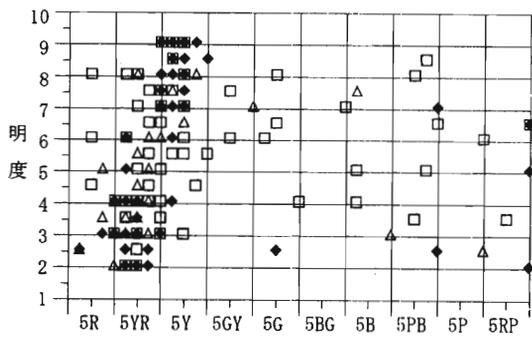


(b) 明度

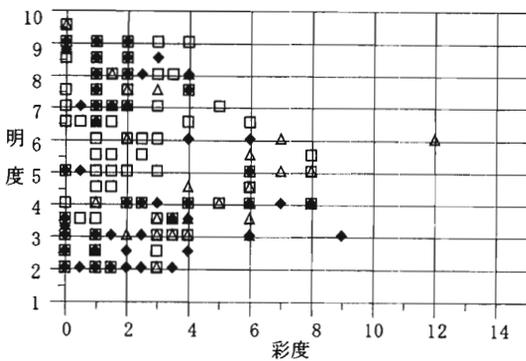


(c) 彩度

図3-6 日本橋，中央通りにおける色彩の出現頻度図



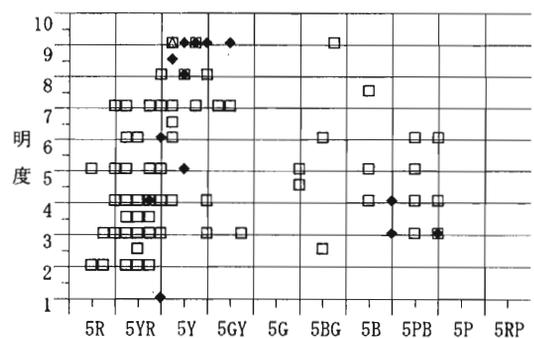
(a) 色相×明度の分布



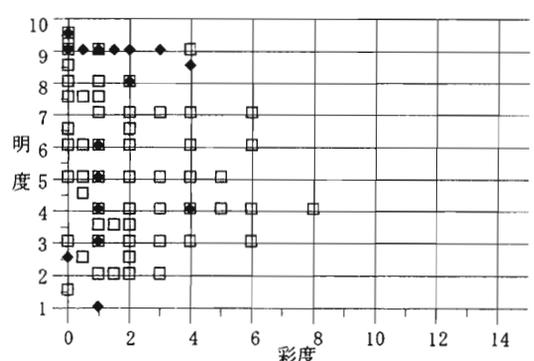
(b) 彩度×明度の分布

図3-5 川崎市，一番街における色彩分布図

◆ 代表色 □ 構成色 △ 付属色



(a) 色相×明度の分布



(b) 彩度×明度の分布

図3-7 日本橋，中央通りにおける色彩分布図

◆ 代表色 □ 構成色 △ 付属色

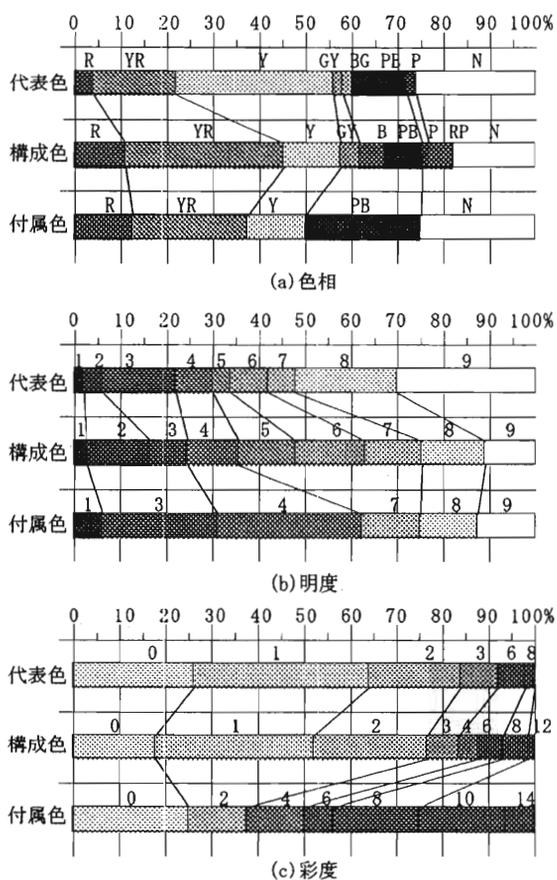


図3-8 渋谷、公園通りにおける色彩の出現頻度図

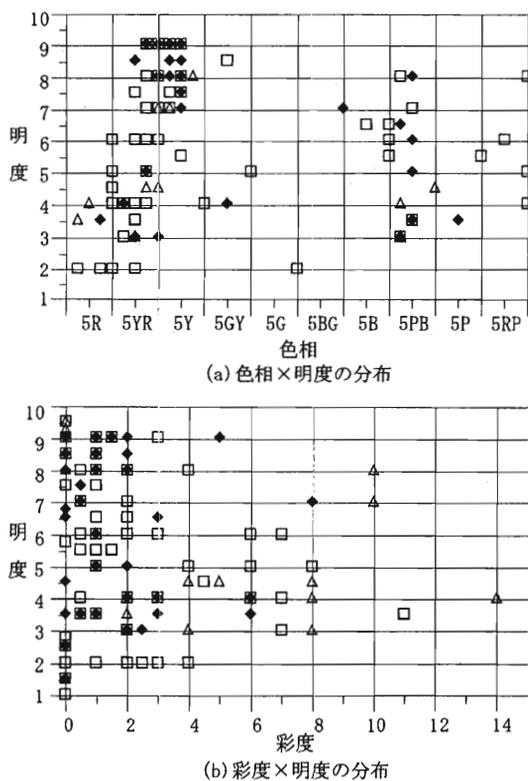


図3-9 渋谷、公園通りにおける色彩分布図
◆ 代表色 □ 構成色 △ 付属色

が(明度9以上が30%)、低明度も多い(明度1.5~4が約28%)。彩度は低彩度が多く、無彩色を含めた彩度2以下が84%を占めていた。極彩色で壁面の大面積を塗色するものがいくつか見られた。

構成色では色相数が増え、寒色系(B, PB, P)が約15%、ほかの街並ではあまり利用されていないRPが5.5%であった。明度はまんべんなく分布していた。彩度は低彩度が多いが、高彩度も見られる。

付属物は、色相数は少ない。赤、黄、青の中明度、高彩度の純色に近い色、または無彩色であった。

建物全体が店舗としてデザインされているものが多く見られたが、代表色と構成色を合わせた建物色を見る限り、それほど色を乱用したデザインではない。

5) ヘント、グラスレイ (図3-10, 3-11)

看板その他の付属色はないが、構成色は比較的多く、建物1棟あたりの平均測色数は5.46である。

代表色は、色相の種類が3種類と少なかった。YRが約54%でもっとも多く、RとYが次いで約23%であった。他の街並に比べ、Rの割合が多かった。明度は4~5が69%であった。また、高彩度が多く、彩度6~10が約54%であった。もっとも割合が多かったこれらの色は、レンガの色であった。素材の色が街並に露出しているといえる。

構成色は代表色に比べて若干色相数は増えるが、寒色系の色相はほとんど使われていない。壁面以外の構成色は、構成要素によって色が決まっていた。例えば窓枠が無彩色の高明度、扉がYR~Yの低明度に分布していた。

建物の色の構成は、窓や扉などの建築要素を塗り分けた単純なものであり、付属色がほとんどなかった。

街並全体を通して色が少なく、赤みがかかったレンガの色で統一されていた。

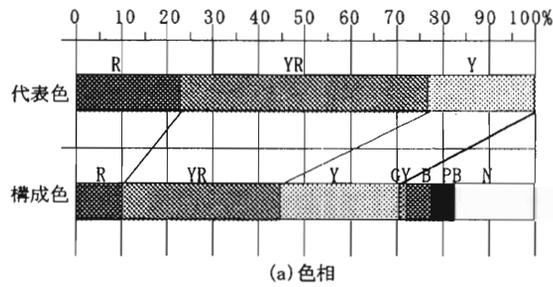
6) ザルツブルク、アルターマルクト (図3-12, 3-13)

建物ごとに1~2色の外壁色があり、それと窓枠などで建物の色は成り立っている。低層部にある店舗ファサードの装飾部分の色が、付属色となっている。建物1棟あたりの平均測色数は5.25であった。

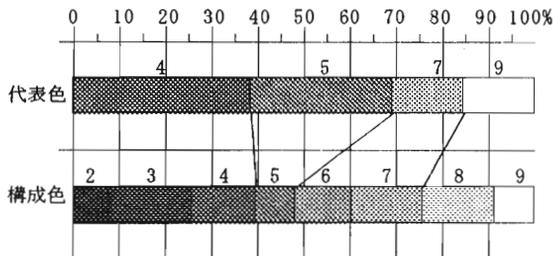
代表色のほとんどが有彩色であり、無彩色が6.25%と少ない。YRが50%で最も多いが、GY(12.5%)とBG(6.25%)といった寒色系もある。明度は7~9まで、彩度は4以下に分布しており、ばらつきが非常に少なかった。

構成色の色相では無彩色が31.4%と最も多かった。Gが出現するが(2.86%)、B, PB, P, RPはない。高明度のNが多いが、これは建物を縁取るようにデザインされた柱型と上層部の窓枠の色である。

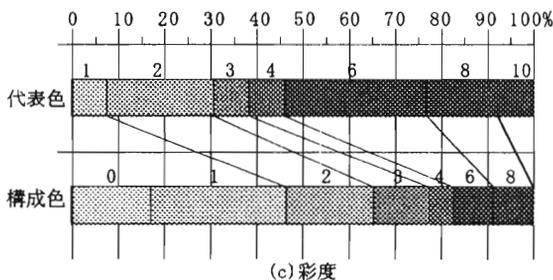
付属色では、YR, Yが多い。低~中明度が見られるがこれは、茶や黒などである。B, PB, P, RPは、付属



(a)色相

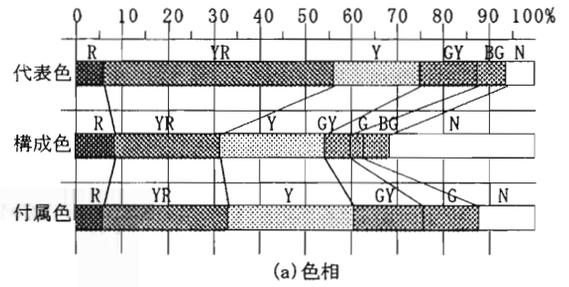


(b)明度

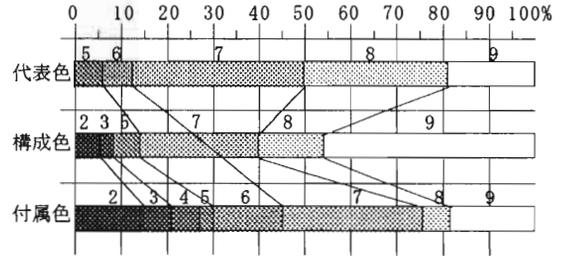


(c)彩度

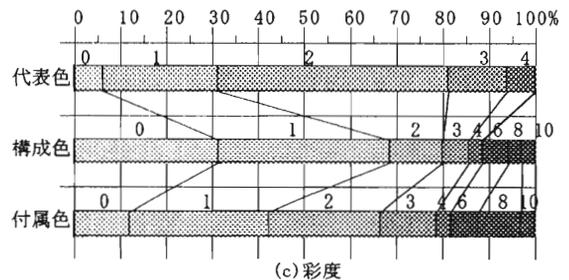
図3-10 ヘント，グラスレイにおける色彩の出現頻度図



(a)色相

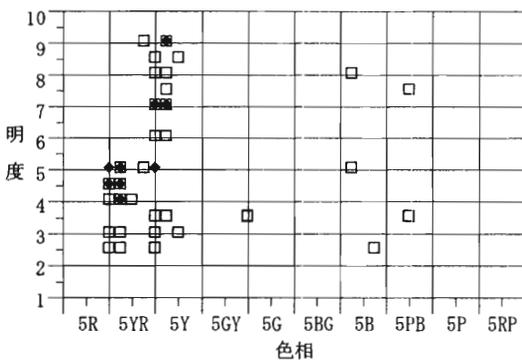


(b)明度

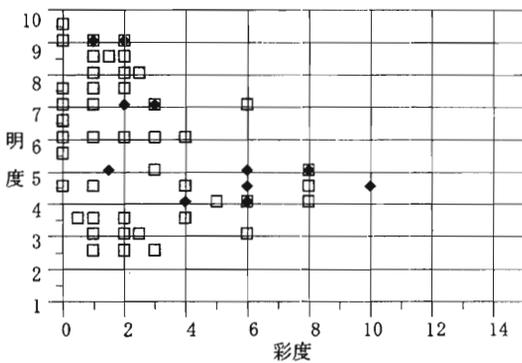


(c)彩度

図3-12 ザルトズブルク，アルターマルクトにおける色彩の出現頻度図



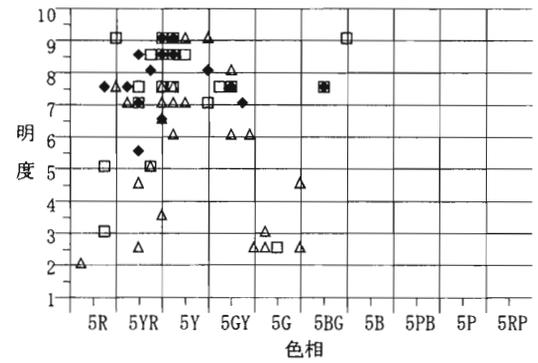
(a)色相×明度の分布



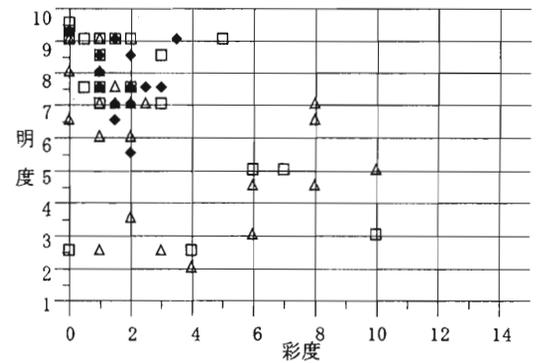
(b)彩度×明度の分布

図3-11 ヘント，グラスレイにおける色彩分布図

◆ 代表色 □ 構成色 △ 付属色



(a)色相×明度の分布



(b)彩度×明度の分布

図3-13 ザルトズブルク，アルターマルクトにおける色彩分布図

◆ 代表色 □ 構成色 △ 付属色

色にも出現していなかった。

代表色は、街並の上層部分の色である。これらは高明度低彩度のペールトーンで統一されていて、色相を変えることによって変化をつけている。一見もっともカラフルな街並であるが、しかし利用されている色相はほかの街並に比べて多くはない。高層部に対して、低層部の店舗部分は茶や黒などの落ち着いた色が多い。この街並は色によって上手く演出されているといえる。

7) ウィーン、マリアヒルフ通り (図3-14, 3-15)

各建物に1~2色の建物色があり、低層部にある店舗ファサードの装飾部分の色が付属色となっている。建物1棟あたりの平均測色数は4.97であった。

代表色は、街並の上層部分にあり、R~Yの同系色が中心になっている。Yが多く(約57%)、少し黄みよった街並である。R, YR, Yが合わせて約87%を占めていた。無彩色が約11%と少なかった。高明度が多く、明度8から9までが約90%を占める。低彩度が多く、彩度2以下が約71%であった。一部に高彩度がある(彩度6~8が8.2%)が、これらはY系の高明度であり、色づいてはいるがあまり目立たない。

構成色では、Y (37.9%), N (28.7%), YR (23.0%)が多い。GY~PBがわずかにある。明度は6以上の高明度、彩度は8以下に分布していた。

付属色も、構成色と同様にN, YR, Yが多い(合わせて約62%)が、構成色に比べて色相数は増え、PBが10.3%利用されていた。明度は低明度から中明度で、彩度は高彩度まで広く分布している。比較的鮮やかな、純色に近い色がアクセントカラーとして利用されていた。

代表色・構成色を合わせた建物色は、7つの街並のうちでもっとも明るい。2階以上の上層部はこの明るい色によって彩色されている。対して、低層部の店舗部分は、色数が多く、華やかに彩られていた。

3.3 街並色彩の考察

1) 色彩分布

全街並を通じて、代表色・構成色を合わせた建物色の色相は、R~YRに多く分布していた。寒色系は日本の街並に多く見られ、渋谷がもっとも多く、今井町や川越市でも若干用いられていた。

街並内での明度の分散は、日本の街並で大きく、欧州の街並では小さい傾向が見られた。

すべての街並で低彩度が多く見られた。無彩色の割合は日本の街並の方が高かった。

2) 色彩と素材との関係

街並の色彩が、素材色から成る場合(今井町, 川越市, ヘント)と、塗色からなる場合(日本橋, 渋谷, ザルツ

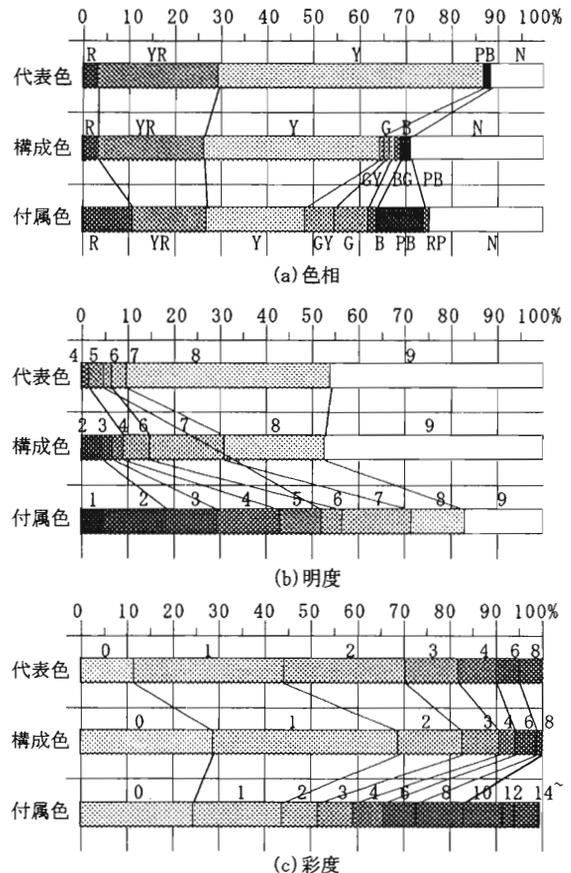


図3-14 ウィーン、マリアヒルフ通りにおける色彩の出現頻度図

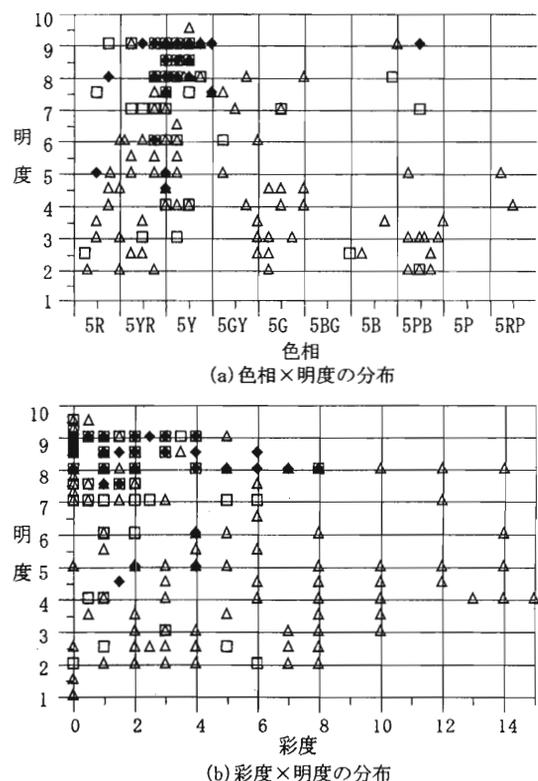


図3-15 ウィーン、マリアヒルフ通りにおける色彩分布図

◆ 代表色 □ 構成色 △ 付属色

ブルク、ウィーン)とがあった。

素材色の街並を比較すると、今井町は漆喰や木材のYR~Yが多いのに対し、ヘントはレンガのR~YRが多い。この二つの街並では、素材の違いが街並の色味の違いに明確に現れていた。

塗色の街並を比較すると、日本(日本橋、渋谷)ではさまざまな色の金属素材が使われていたが、欧州(ザルツブルク、ウィーン)では金属素材は低層部の店舗装飾のみに利用されており、建物の基調色にはなっていなかった。

3) 塗り分け

色彩情報を街並に合わせて2次元的に配置し、街並の色の塗り分けの効果を確認した。

日本の古い街並(今井町、川崎市)では、建物の上下層で仕上材が異なり、上階部が漆喰、下階部が木材であった。これが横方向に連続しており、街並全体としてまとまり感を出していた。

一方、欧州の場合は、上層部ではある程度規則的に色彩を使用し(ザルツブルクはトーンを統一、ウィーンは類似色相で統一)、下層部では店舗エントランスの装飾としてさまざまな色を活用していた。

低層部と上層部との色彩の二層化、街並を見渡したときの連続性、という2点は、日本橋や渋谷などの日本の新しい街並には見られない傾向であった。

また、欧州では、扉や上層部の窓枠等を利用して塗り分けを積極的に行い、建物構成要素を強調していた。日本では、細かい色の塗り分けがされていることはほとんどなかった。

4. まとめ

歴史調査からは、歴史の変遷の類似した日欧の街並を相互に比較することにより、個々の街並の特徴が明快に説明できることが明らかになった。

まず、今井町とヘントが、古いままに保たれていて、素材色が街の色の中心である街並として、比較できる。ヘントに比べ、今井町では新しい建物がいくつかあり、それらが街並の色彩調和を乱している。

次に、川崎市と日本橋とザルツブルクが、歴史的にさまざまな変遷をたどった街並として比較できる。川崎市と日本橋では古いものと新しいものが混在しているが、ザルツブルクでは統一して新しく塗り替えられる傾向が見られる。

最後に、渋谷とウィーンが、他の街並に比べて新しい街並として比較できる。ウィーンでは1階部分だけが改装して新しくなっているのに対し、渋谷では建物全体が新しい。

色彩調査からは、歴史調査で予測された色彩の傾向が、

次のように定量的に確認された。

欧州の3街路の方が、基調色に使われている色相の数が少なく、また無彩色の割合が少なかった。比較的新しいウィーンの街並でも、無彩色の割合が1割であり、また色相が少なく、まとまっていた。

これに比べ、日本の4街路の方が色相が多岐にわたっており、また無彩色の割合が多く、明度、彩度のばらつきが大きかった。

歴史調査と色彩調査で示されたように、日本の街並には色彩的に整然さが不足している。それぞれの街並に対して、歴史の変遷が似通っている欧州の街並の色彩が参考になると考えられる。

<参考文献>

- ・文化庁：歴史的環境保全市街地整備計画調査報告書，昭和52年度国土総合開発事業調整費，1978
- ・林清三郎：今井の建物，今井町町並み保存会，1998
- ・川崎市教育委員会編集：蔵造りの町並，川崎市文化財保護協会復刻版，1993
- ・村松貞次郎監修 尾形光彦：町・明治大正昭和 絵葉書にみる日本近代都市の歩み 1902-1941 関東編，都市研究会，1980
- ・Luc Lekens & Gaston De Smet：“Guide to Ghent”，Snoeck-Ducaju & Zoon，1995
- ・Ministerie van Nederlandse Cultuur：“Inventaris van het Cultuurbezit in België Architectuur | deel 4na Stad Gent”，Brepols，1991
- ・Christiane Krejs：“Die Fassaden der Bürgerhäuser” Bauformen der Salzburger Altstadt Band 2, Landesinnung der Baugewerbe (Salzburg), 1994
- ・Bundesdenkmalamt：“Die Kunstdenkmäler Österreichs, Salzburg Stadt und Land” Dehio-Handbuch, Anton Schroll & Co., 1986
- ・Robert Messner：“Salzburg im Vormärz, Historisch-topographische Darstellung der Stadt Salzburg auf Grund der Katastralvermessung” I. Band, Verband der wissenschaftlichen Gesellschaften Österreichs, 1990
- ・Bundesdenkmalamt：“Die Kunstdenkmäler Österreichs, Wien II. bis IX. und XX. Bezirk” Dehio-Handbuch, Anton Schroll & Co., 1993
- ・Friedrich Achleitner：“Österreichische Architektur in 20. Jahrhundert, Band III/1 Wien 1. -12. Bezirk”, Residenz Verlag, 1990
- ・Martin Wörner & Gilbert Lupfer：“Stuttgart, Ein Architekturführer” 2. Auflage, Dietrich Reimer Verlag, 1997